

# 御堂関白記における音ヨミの通用について

安 田 博 重

## はじめに

これまで、藤原道長自筆の御堂関白記には誤字脱字が多く、そしてその修正跡もまた多い、というふうに言われてきた<sup>(1)</sup>。

御堂関白記の自筆本において、現代日本社会における規範的表記<sup>(2)</sup>とは異なる変則的表記が目につきやすいことは、調べてみると確かにそのような印象を受けた。また、塗抹による抹消や、重ね書きによる訂正等は特に印象に残りやすいと考えられ、誤りや修正跡が多い、というふうに言われてしまうのも致し方無いことなのかもしれないと感じた。しかしながら、それらは決して道長個人の性格や表記の能力の実態を表すものではないし、また御堂関白記にのみ当てはまるものでもない。現代の我々の表記活動を観察してみると、同じような点は多く見つかるのである。

例えば文章を書くこうとする時、特に、その草稿段階においては、書くこうとする内容を頭に思い描きながら、それを次から次へと「ことば」化し、記していく。その際に、語順や文字などを全く間違えることなく、脇道にも逸れずに筋の通った文章を作ることが出来る人が果たしてどれほどいるであろうか。極めて短い文章ならばともかく、普通は推敲を重ね、修正を加えてゆく。そのような作業は誰もが行うことであろうと想像される。況や道長の場合は漢文

（正格の漢文ではない、所謂変体漢文と呼ばれるものである）で記しており、誤謬とその訂正を繰り返したであろうことは容易に想像がつく。

また、変則的表記のうち、特に略記を生みだす要因の一つとして考えられるのは、具注暦の限られたスペースに日記を記していることである。これは我々が手帳にスケジュールを書き込むのに似ている。初めは丁寧につづつ書いていたとしても、何度も繰り返し使用される言葉などは、ある時点から往々にして略記されたり記号化されたりするものである。その略記されたり記号化されたりした「ことば」は、文章を書くための、所謂一般的な表記というものからすれば、当然特殊な表記ということになるであろう。

このように考えてみると、御堂関白記も他の男性貴族の日記も、ひいては現代の我々のノートやメモですらも「ことばの表記の方法」という面においては、それほど大差無いものと考えられる。もし、御堂関白記が他の日記と異なる大きな特徴があるとすれば、誤字脱字や修正跡も生々しい草稿のままの自筆本が遺され、伝えられてきたという点にあらう。それはおそらく、書き手が藤原道長という人物であることは無縁ではなからう。

とはいっても、御堂関白記を資料として取り上げ、文字・表記の視点から論じていくとなると、そこに現れる変則的表記をどう解釈するのか、という問題を避けて通ることはできない。また、変則的表記と呼ばれるもの自体も、約千年前に書かれたものを、現代の我々が、現代日本社会における規範的表記の意識に照らしあわせた結果、変則的表記である、と判断しているだけであり、もしかすると平安時代中期の貴族社会の認識では、変則的なものでも特殊なものでもなく、許容範囲のうちの一つであつたのではないかと考えることもできる。現代の規範的表記と異なっているから変則的表記である、として全てを等し並みに扱ってしまうと、本質を見誤ってしまうことになりかねない。本稿では、御堂関白記自筆本における変則的表記と考えられるもののうち、音の通用<sup>ヨミ</sup><sup>(3)</sup>による表記についての用

例を掲載し考察する。ただし、紙幅の都合により、特徴的な用例のみをとりあげ、少数例のものは、これを除いた。

## 一 先行研究

御堂関白記についての論文は多数見られるが、しかし、文字・表記に限ってみるならば、管見では高松政雄（一九六二）を嚆矢として、小山登久（一九七二）、佐藤稔（一九八〇）、峰岸明（一九九六）、同（二〇〇三）、高橋久子（二〇〇四）と多くない。この中で、字音の通用の各事象を詳細検討しているものが佐藤稔（一九八〇）である。

佐藤（一九八〇）は、御堂関白記における漢字の変則的用法の、中でも字音の通用に関して、まず、諧声符を同じくするかどうか、字形の類似が認められるかどうか、という漢字の「形」の点から分類し、それぞれの用例を挙げ、道長の通用の傾向を見出そうとするものであり、その論旨には首肯するべき点が多い。しかしながら、各用例の用例数（変則的表記で表記されたものだけでなく、規範的表記に従って正しく書かれたものも含めての用例数）が一切示されておらず、意識的な変則的表記をとった用例であるのか、それとも無意識に表記してしまった、誤記誤用、もしくは極めて誤記誤用に近い用例であるのか、という判断を下すことができない<sup>(4)</sup>。

よって本稿では、字音の通用についての用例数を全て表示することで佐藤の論を補強し、また佐藤が表面的に触れるにとどまった和訓による通用にも触れることで、道長が実際にどのように文字を通用させたのかを明らかにしたい。

## 二 用 例

御堂関白記自筆本内に見られる字音・和訓を含めた音による通用と思われるものは全てあわせると580例ほどになるが、その中でも特徴的な用例を以下、見ていくこととする。

なお、該当箇所には右に●印を付した。右に▲印のあるものは通用等により「本来書かれるべき、規範的表記に則った表記」（以下、佐藤（一九八〇）の用語に従い、これを「正書」と呼ぶこととする<sup>⑤</sup>）とは異なる表記となっている箇所であり、直後の亀甲括弧内に「正書」にあたる文字を書き入れた。数字は用例数。丸括弧内は変則的表記が認められたものであり、「正書」、変則的表記の順に用例数を示した。なお、「正書」の用例は挙げていない。

### 1 「太」字を「大」字で通用

◆太上天皇1（太上天皇0・大上天皇1）

1. 長保元年八月十九日 依大上天皇御幸例

◆太后5（太后3・太后2）

2. 寛仁二年正月三日 此間太后参上給 ……同様に他1例

◆皇太后

・皇太后1（皇太后0・皇太后1）

・皇太后宮48（皇太后宮40・皇太后宮7・太后宮1）

・皇太后宮大夫16（皇太后宮大夫11・皇太后宮大夫4・皇太后大夫1）

3. 寛仁二年正月七日 皇太后為大〔太〕皇太后有文（皇太后）

4. 寛弘四年十二月二日 皇太后宮明理（皇太后宮）……同様に他6例

5. 寛弘六年十二月廿六日 皇太后宮大夫（皇太后宮大夫）……同様に他3例

◆太皇太后

・太皇太后2（太皇太后0・太皇太后2）

・太皇太后宮9（太皇太后宮3・太皇太后宮2・太皇太后宮2・大皇太后宮1・皇太后宮1）

・太皇太后宮大夫5（太皇太后宮大夫2・大皇太后宮大夫1・太皇太后宮大夫1・大皇太后宮大夫1）

6. 寛仁二年正月七日 皇太后（太）后為大皇太后有文（太皇太后）……同様に他1例

7. 寛仁二年五月廿五日 從大皇太后宮樹甘重給（太皇太后宮）……同様に他1例

8. 寛仁二年四月八日 太皇太后宮御御手水間（太皇太后宮）……同様に他1例

9. 長保二年正月十九日 大皇太后宮御法事（太皇太后宮）

10. 寛仁二年三月廿五日 大皇太后宮大夫（太皇太后宮大夫）

11. 長保元年十月十九日 此間太皇太后宮大夫來（太皇太后宮大夫）

12. 長保元年十一月七日 大皇太后（宮）大夫（太皇太后宮大夫）

◆太政大臣

・太政大臣1（太政大臣0・太政大臣1）

・一條後太政大臣1（一條後太政大臣0・一條後太政大臣1）

・小野太政大臣1（小野太政大臣0・小野太政大臣1）

13. 長和元年正月廿七日 彼太政大臣任右大臣事（太政大臣）

14. 長和元年正月廿七日 一條後大（政）（※「政」字虫損）大臣為右大臣時（一條後太政大臣）

15. 長和元年五月一日 前年小野太政大臣夢相同之（小野太政大臣）

◆泰伯篇1（泰（太）伯篇0・大伯篇1）

16. 寛弘六年十二月一日 論語大伯篇

それぞれ、「太上天皇（ダイジャウテンワウ）」、「ダジヤウテンワウ」、「太后・太后（おほきささき）」・「太后（タイコウ）」、「皇

太后（クワウタイゴウ）（「クワウダイコウ」、「太皇太后（タイクワウタイゴウ）」、「太政大臣（ダイジャウダイジン）」、「泰（太）伯篇<sup>6)</sup>（タイハクヘン）」と読むもの<sup>7)</sup>と考えられる。ただし、和訓で読む可能性も否定することはできない。

「皇太后」という語に関して、用例を見る限り比較的「正書」で書かれることが多い。その一方「太皇太后」になると、用例数が少ないので不明確な部分は多いけれども、表記に揺れが多く、不安定であると言えよう。「太上天皇」、「太政大臣」はすべて「大」字で表記されている。

「泰伯」は「太伯」とも書くようであり、ここでの「大」字は、「泰」字との通用とも考えられるし、「太」字との通用とも考えられるが、「タイ」という字音により通用している。

## 2 「大」字を「太」字で通用

◆大殿1（大殿0・太戸1）

17. 長保元年七月廿九日 依故一條太戸<sup>●▲</sup>〔殿〕御忌日女方渡仁和寺

◆大内184（大内12・太内170・太内の上から抹消1・太内の繰返記号〔太内々々〕・1）

18. 長保二年正月四日 従太内参院 ……同様に他169例

◆大内裏1（大内裏0・太内裏1）

19. 長和元年四月廿三日 参<sup>●</sup>太内裏

※「大」「内」含むその他の語

・大内記1

◆大僧正

・大僧正3（大僧正2・太僧正1）

・前大僧正5

20. 長和元年五月七日 太僧正目代威儀師覺譽法師解<sup>▲</sup>〔懈〕怠等催行

※「大」「僧」含むその他の語

・大僧都12（大僧都8・大僧3・大都僧1）

・権大僧都2

ここで注目すべきはやはり「大内」を「太内」と表記した例の多さであろう。抹消、繰返記号のものも含めて「太内」は172例、道長は「おほうち」という語を「太内」と書くものだと認識していたのではないかと思われるほどで、「大内」の用例は寧ろ、点の打ち忘れのようにも思えてくるほどである。

「大内裏」の語は「タイダイリ」とも読むそうであるから、それならば「太内裏」と書くことがあっても不思議ではない。また、「大内裏」と前述の「おほうち（大内）」とは類義語であるが、その「大内」を「太内」と多数表記していることも深く関係していると考えてよいであろう。

「大僧正」を「太僧正」とした例はこの一例のみであり、他の「大僧正」や「大僧都」などは全て「大」字であるので、これは筆の勢いで誤って「大」字に点を付加してしまったと考えられる。

3 「内」字を「大」・「太」字で通用

◆内裏12（内裏3・大裏2・太裏7）

21. 寛弘七年二月廿九日 大裏并所々（内裏）……同様に他1例

22. 寛弘五年八月六日 参太裏（内裏）……同様に他6例

「内」字を「大」字、「太」字で通用させている語は「内裏（ダイリ）」のみであり、他の「内」を含む語で「内」字は通用させることがない。

4 「絹」字を「見」字で通用

◆正絹30（正絹3・正見27）

23. 長保元年八月廿日 官人正見……同様に他26例

※「絹」字を含むその他の語

・絹51・平絹1・生絹4（生絹2・生2）・絹蓋1・絹布1・長絹1

「正絹（ヒケン）」を「正見」と通用させた例が際立っているが、それ以外は全て「絹」字である。「正絹」という言葉に限って

はよく使用されるため、より画数の少ない「見」字を用いて表記した、と考えてよいであろう。

## 5 「捧」字を「俸」字で通用

### ◆ 捧物

- ・ 捧物 14 (捧物 2・ 俸物 11・ 捧 1)
- ・ 御捧物 1 (御捧物 0・ 御俸物 1)

24. 長保元年七月廿九日 殿上人多来俸物有所々(捧物)……同様に他 10 例

25. 長和元年五月十七日 御俸物金百両丁子両各人瑠璃壺(御捧物)

「捧」字を「俸」字で通用させた例が多いが、「捧」字できちんと表記されたものもそれなりに存在するので、どのような意図での通用であるのか、はつきりしたことは言えない。

## 6 「仗」字を「丈」字で通用

### ◆ 仗座 22 (仗座 3・ 丈座 18)

26. 長保元年九月十四日 著左丈座定季御讀経事(仗座)……同様に他 17 例

### ◆ 左仗・ 右仗

- ・ 左仗 9 (左仗 3・ 左丈 5)
- ・ 右仗 1

27. 寛弘元年四月十四日 参内著左丈(左仗)……同様に他 4 例

「仗」字、「杖」字を「丈」字で通用させたものは省画とも考えられる。その中でも「仗座」を「丈座」とした例が多く見られる。

## 7 「陪」字を「倍」・「陪」字で通用

### ◆ 陪従 11 (陪従 6・ 倍従 5)



28. 寛弘元年二月五日 次倍・從諸大夫若小男共等布衣渡庭 …… 同様に他4例

◆陪膳

・陪膳11 (陪膳9・倍膳1・陪膳1)

・御陪膳1

29. 寛仁二年正月五日 倍膳采女進御盞采女受之置御臺盤候 (陪膳)

30. 寛仁二年四月廿八日 乳母藤 子陪膳 (陪膳) ※空白ママ

「陪從」が「正書」だが、「倍從」もほぼ同数登場する。一方「陪膳」の場合は圧倒的に「陪」字である。「陪從」の場合は、「從」字のイ偏に牽引されて、形が近いイ偏の「倍」字が表記されやすかったのではないだろうか。ただし、それならば「陪膳」の時には、「膳」字の月偏に牽引されたと考えられる「陪膳」が半数近く登場しても不思議ではないはずであるが、実際は1例である。これはおそらく、「陪」字が常用されることのない漢字だからであろう。

8 「供」字を「共」字で通用

◆供49 (供46・共3)

31. 寛弘六年十一月廿五日 酉時共御湯 …… 同様に他2例

◆供奉17 (供奉8・共奉9)

32. 寛弘元年六月十一日 共奉幸行 (行幸) …… 同様に他8例

◆供養

・供養26 (供養22・共養2・供卷1・供奏1)

・供養法1

・塔供養1

33. 寛弘二年五月四日 共養仁王經千部 …… 同様に他1例

省画とも考えられる例である。「供奉」の例に少し多く「共奉」の形が見られるのは、「正書」が殆どであり、「供奉」という語においてのみ「共」字で通用させる傾向がある、という程度である。

9 「義」字を「儀」「議」字で通用

◆論義

・論義7（論義2・論儀3（中、儀論1）・論議2）

・御論義3（御論義2・御論議1）

34. 寛弘元年正月十四日 但講師論儀了立座（論義）……同様に他1例

35. 寛弘元年正月十四日 儀論問瀧口者発音為闕乱（論義？）

36. 寛弘元年五月一日 依例以請僧可然令論議（論義）……同様に他1例

37. 長和元年正月十四日 御論議祿等如常（御論義）

◆証義3（証義1・証議2）

38. 寛弘元年五月十九日 證議二者二人加四位……同様に他1例

10 「儀」字を「義」字で通用

◆儀19（儀18・義1）

39. 寛弘六年七月廿七日 其義如常

◆儀式2（儀式1・義式1）

40. 寛弘二年五月廿四日 南京住〔注〕記妙玄山住〔注〕記懷命義式各相分

◆威儀師6（威儀師3・威儀2・盛義1）

41. 寛弘六年十二月四日 御前物盛〔威〕義物也

11 「議」字を「儀」字で通用

◆〔叙位議〕に関する 議9（議2・儀7）

42. 寛弘二年正月四日 非可参叙位儀由令奏聞……同様に他6例

◆議所5（議所3・儀所2）

43. 寛弘八年正月五日 儀所儲依無其所儲宜陽殿 ……同様に他1例

◆議定1 (議定0・儀定1)

44. 寛弘元年六月十七日 儀定後所々別當定

◆参議

・参議8

・非参議1 (非参議0・非参儀1)

45. 寛弘六年十二月廿九日 非参儀大弁説孝著横座申、文

「義」、「儀」、「議」三字のそれぞれの通用である。「論義」は「論議」とも表記する<sup>(8)</sup>ようで、そうであるならば変則的表記から外して考えてもよいのかもしれない。また、「証義」も「論義」と関係の深い語であるので、「論議」という表記が変則的表記から通用として考えられる例となる。これは増画とも考えられる<sup>(9)</sup>であろう。

また一方の「儀」字であるが、「義」字としか通用しない。これは省画とも考えられる。また通用するとはいうものの、そもそも「正書」で書かれることの方が圧倒的に多い。

「議」字は「儀」字とのみ通用し、「義」字との通用例は見当たらない。

また「儀」字になるものも、「叙位議」に関する語のみが「儀」字で通用され<sup>(10)</sup>、「叙位議」が「儀式化」、つまり形骸化していたのではないかと思わせられるような通用の仕方となっている。そう考えると前述の「論義」にしても「論儀」とする例が存在するというのは、行事の形骸化を臭わせるようでいて、興味深い。

## 12 「脚」字を「却」字で通用

◆○脚 (○は数字)

・一脚2 (一脚0・一却2)

・二脚5 (二脚0・二却5)

・三脚1 (三脚0・三却1)

・六脚 1 (六脚 0・六却 1)

46. 寛仁二年正月三日 八足白木机三却・(脚) 一却三尺二却・(脚) 二尺五寸(一脚) ……同様に他 6 例

「脚」字は全て例外なく「却」字で通用させている。全て単位の「脚」であり、「あし」の意味での「脚」字の使用例は無い。「あし」の意味で「脚」字を書くこととなった場合に、道長は通用させたであろうか、興味深いところである。

### 13 「浄」字を「静」字で通用

◆不浄 4 (不浄 0・不静 4)

47. 寛弘元年六月十八日 不静・依有恐召晴明光榮等令占 ……同様に他 3 例

「不浄」という言葉の場合のみ「静」字と例外なく通用させている。「不浄」という概念よりも、その「不浄」により「心が穏やかでない」という意味で「不静」と表記しているのであろうか。

### 14 「授」字を「受」字で通用

◆授 24 (授 10・受 14)

48. 寛弘元年二月七日 春宮大夫少童見物来少将用野釵受 ……同様に他 13 例

◆勅授 1 (勅授 0・勅受 1)

49. 寛弘八年六月十三日 勅受・余加隨身等宣旨下

◆教授 1 (教授 0・教受 1)

50. 長和元年五月廿三日 教受・二人三綱修理別當各三疋

授受の別は全文体を見なければ意味がわからないので、文字だけを見て通用かどうかを判断するのは無理である。また、全文体を見ても判断できない場合も時に存在し、解釈次第で「授」字とも「受」字ともなりうる場合がある。授受の問題に関しては今後の課題として後日の機会に譲りたい。

15 「旧」字を「久」字で通用

◆旧年1（旧年0・久年1）

51. 長保二年正月一日 是久年依申諸卿定也

◆旧主3（旧主0・久主3）

52. 寛弘八年六月十三日 但久主不御南殿又御表間久主無御出 ……同様に他1例

16 「救」字を「久」字で通用

◆経救5（経救1・経久3・経久の繰返記号〔経久々々〕1）〈僧名〉

53. 寛弘元年三月廿九日 又不入経久依出憐因件入経久々々観印尤美也 ……同様に他1例

「旧」字と「救」字を「久」字で通用した例。「旧主」とは一条天皇のことを指す。寛弘八年六月十三日に一条天皇は三条天皇に譲位するが、用例52. はその日の記事である。一条天皇を「久（旧）主」、三条天皇を「新帝」と道長は表記しており、「旧」字を存命中の天皇に使うことを避けたと考えられなくもないが、しかし「旧」字が、忌避せねばならないほどの悪い意味を持つ字であるのかどうか、疑問である。それよりも、「旧年」や僧侶の名である「経救」にも「久」字を通用させていることを考えると、「久」字は「キウ」という音を代表する漢字として使用されたと考えられるのではなからうか。

17 「孝」字を「教」字で通用

◆孝経

・御注孝経1

・孝経1（孝経0・教経1）

54. 寛弘五年九月十一日 酉時右少弁廣業讀書教・経朝夕同

◆説孝8（説孝7・説教1）〈人名〉

55. 寛弘五年十月四日 還著後大弁遲著説教間史博愛早出進文

◆孝養1（孝養0・教養1）

56. 長和元年正月廿七日 子讓父依教・養免給

「孝」字を「教」字で通用している。「孝経」（カウキヤウ）の例は字音「カウ」で通用。「孝養」（ケウヤウ）の例は字音「ケウ」で通用。「説孝」は人名で、和訓「ときたか」と読んだか。しかし有職読みのように字音で読んだ可能性も否定できない。

18 「簿」字を「薄」字で通用

◆名簿3（名簿0・名簿3）

57. 寛弘元年正月六日 令奏中宮御給名簿……同様に他2例

「簿」字と「薄」字は字音が異なるため、音の通用ではないと考えることも可能であるが、一応採録することとした。なお、佐藤（二九八〇）にはこの例は採録されていない。

「薄」字を「簿」字で通用させた例は存在しなかった。「薄」字を含むその他の語は、「簿物」2例、「薄色」1例であった。道長は日記中で「薄」・「簿」両字を、全て「薄」字で表記している。

19 「惟」字を「宣」字で通用

◆惟規4（惟規3・宣規1）（人名）

58. 寛弘元年正月十一日 女御尊子仰可作位記由少内記宣規

この日の記事に書かれた人物は藤原惟規（のぶのり）という名であるが、名前に使用される「惟」字は普通「これ」という音になることが多い。実際、日記中に現れる惟規以外の「惟」字を持つ人名は、全て「これ」という音であり、「惟」字を「のぶ」と読ませる名は惟規だけである。その惟規の名が道長によって、初めて日記に書かれたのが右の日の記事であり、道長は「のぶのり」という音から「宣規」と表記した。しかしその後、道長はこの「宣」字が誤りであることを知ったか、誤りであると気づいたようで、これ以降「のぶのり」の名はすべて「正書」の「惟規」で表記している。

右の例は人名の音に対して、それを代表する漢字（高い確率で使用される漢字）を充てたものである。これは現代の我々も、特に人名を漢字表記する必要がある場合、仮の措置としてはよく行うことであると考えられる。

20 「宣」字を「信」字で通用

◆頼宣2（頼宣0・頼信2）（人名）

59. 寛弘八年四月廿一日 使文章生頼信……同様に他1例

21 「業」字を「成」字で通用

◆親業2（親業0・親成2）（人名）

60. 寛弘八年四月十三日 右近将監親成令奉仕 ……同様に他1例

22 「成」字を「重」字で通用

◆頼成2（頼成0・頼重2）（人名）

61. 寛弘八年四月十五日 所者頼重……同様に他1例

20 から22まで、19と同じく、ある音に<sup>ヨミ</sup>対して、代表的と思われる字で通用させた例である。なお、全て人名である。以下、順に見ていくと、20は「のぶ」という音に<sup>ヨミ</sup>対して、最も代表的と言えるであろう「信」字、21は「なり」という音に<sup>ヨミ</sup>対して、「成」字、22は「しげ」という音に<sup>ヨミ</sup>対して、「重」字でもってそれぞれ通用させている。

23 「妻」字を「妾」字で通用

◆妻7（妻0・妾7）

62. 寛弘四年七月十四日 出居座在東妾云々 ……同様に他3例

「つま」という語には「配偶者」という意味と「建物やモノの側面」という意味があるが、道長は意味の区別なく全て「妾」字で表記している。因みに、日記中に出現する「つま」は全部で7例であり、その中、「配偶者」の意味で使用されたものが3例、「建物の側面」の意味での使用が2例、「机の側面」の意味での使用が2例という結果であった。右の用例62とその他同様の例3例は、「配偶者」の意味で使用された「つま」を除いた「つま」である。

24 「仮」字を「借」字で通用

◆仮10（仮9・借1）

63. 長和元年五月廿七日

●借除皇太后宮御服給

◆仮屋2（仮屋0・借屋2）

64. 寛弘四年八月十三日

●借屋数屋立 ……同様に他1例

「仮に」という副詞であるが、それを「借」字で通用させている。「仮」字に「借りる」という意味があり、「借」字にも「仮に」の意味があり、通用が起こりうる関係ではあるが、しかし、「正書」の例が多く、この通用はあくまでも例外的なものと考えられる。

一方で「仮屋」は「仮に」とは事情が異なっている。用例数は2例と少ないものの、全て「借屋」で表記されている。『日本国語大辞典』を調べてみると、「仮に作った家。まにあわせの家。借家<sup>11)</sup>。」とあり、また「借屋」の項目も存在し、「かりや（仮屋）に同じ<sup>12)</sup>。」とある。峰岸の注に従い「仮」字を「借」字で通用した例としたが、もしかするとこれは通用ではなく、「正書」の許容範囲内の表記だったのではあるまいか。

25 「襲」字を「重」字で通用

◆下襲

・下襲8（下襲2・下重6）

・御下襲4（御下襲0・御下重4）

65. 寛弘六年十一月八日

●祭使忠経許舞人下重送（下襲）……同様に他5例

66. 寛仁二年正月三日

●改表衣御下重（御下襲）……同様に他3例

「したがさね」を「下重」と書いた例であるが、『日本国語大辞典』を見ると「したがさね」の項に「下襲」、「下重」の両表記があり<sup>13)</sup>、24の例と同じく、通用ではなく、「正書」の許容範囲内の表記だったのではあるまいか。



26 「沈」字を「深」字で通用

◆沈

・沈2 (沈0・深2)

・沈香2 (沈香1・深香1)

67. 寛弘二年五月廿四日

両相府献念数右府深内府紫檀 (沈) ……同様に他1例

68. 寛弘元年正月十一日

以深香念数为志 (沈香)

「沈香 (ヂムカウ)」を「深香 (ジムカウ)」と表記した例。

漢字の持つ意味において、「沈」と「深」が指し示す方向——両字ともに「下向きのベクトル」を持つ——が良く似ているといえる。

また字形では、「沈」字の異体字「沉」字に「木」字を加えると「深」のような字となる。もし、「沈む (香) 木」を合字にして「深」字と表記するような一種の文字遊びが、平安中期に行われていたのだとしたら、非常に興味深いことであるが、しかし極めて危うい、妄想とも言える憶測である。

表面上は四つ仮名の混淆例のようになってしまっているが、「沈」と「深」の、それぞれの漢字の持つ意味が相互に影響を与えた結果生じた表記であると考えられるのではなからうか。

27 「臈」字を「勞」字で通用

◆上臈3 (上臈1・上勞2)

69. 寛弘元年正月十四日

上勞不被召問 ……同様に他1例

◆一臈1 (一臈0・一勞1)

70. 長和元年正月廿七日

拔出近衛次将至年勞并所々一勞者如常

臈は「ラフ」、「勞」は「ラウ」であるが、p入声の区別は消滅していたのであろうか。判断するすべを持たないので、ここではこれ以上言及しない。字音の近さよりも、年功による「臈」と「年勞」との意味の近さゆえに生じた表記と考える方が穏当であろう。

28 「簀」字を「責」・「簀」字で通用

◆簀子

・簀子 7 (簀子 2・簀子 1・責子 2・簀子 2)

・簀子 敷 7 (簀子 敷 2・責子 敷 1・簀子 敷 3・簀子 敷 1)

71. 寛弘四年七月十四日 敦<sup>▲</sup>(敷) 王卿座以責子(簀子) ……同様に他 1 例

72. 寛弘五年十月十六日 中央間簀子敷<sup>●</sup>(敷) 円座(簀子)

73. 寛弘元年五月廿七日 此間候王卿責子敦<sup>▲</sup>(敷) 有数盃(簀子敷)

※「簀」字を含むその他の語

・簀薦 4 (簀薦 1・簀薦 3)

「簀子」の例は増画と言えるであろう。「すのこ」と読むものであるから、「責子」に関しては、音による通用ではなく、省画である。

29 「渡」字を「度」字で通用

◆渡 95 (渡 92・度 5)

74. 寛弘四年十二月廿二日 各論月度…同様に他 4 例

◆渡殿 16 (渡殿 14・度殿 1・度 1)

75. 寛仁二年正月三日 即從南殿与東對度殿作打橋(渡殿)

76. 寛仁二年三月七日 東南度(殿) 上達部殿上人儲座(渡殿)

30 「度」字を「渡」字で通用

◆度者 8 (度者 6・渡者 2)

77. 寛弘四年十二月二日 渡者給使右近中将公信 ……同様に他 1 例

31 「絃」字を「筵」字で通用

◆管絃3 (管絃1・管絃2)

78 寛仁二年閏四月六日 通夜有管<sup>●</sup>筵事 ……同様に他1例

「管」字に引きずられて糸偏から竹冠になったもの。冠揃。

32 「掌」字を「常」字で通用

◆掌侍

・掌侍3 (掌侍0・常侍3)

・前掌侍1 (前掌侍0・前常侍1)

79 寛弘七年閏二月六日 常侍綾卦<sup>▲</sup>(掛) 袴(掌侍) ……同様に他2例

80 寛弘二年五月二日 入量能宿所盗人籠前常侍(右) 近家(前掌侍)

「掌侍」という語は「正書」が全く出てこず、全て「常侍」と表記されている。他の「掌」字を含む語は「官掌」2例、「省掌」2例であるが、それらは全て「正書」で書かれている。「掌侍」は「ないしのじょう」や「シヤウジ」と読むが、「シヤウジ」は「尚侍」(ないしのかみ・シヤウジ・シヤウシ)と音が衝突する可能性があるため、「ないしのじょう」の「じょう」という音も手伝って「常侍」と表記されるようになったのではなからうか。また、そこには「常侍」という意味も手伝っているようにも考えられる。

33 「棧」字を「散」・「狭」字で通用

◆棧敷6 (棧敷0・散敷2・狭敷1・狭食3)

81 寛弘八年四月十八日 御一条家散敷室(棧敷) ……同様に他1例

82 長和元年四月廿四日 渡狭敷<sup>●</sup>室(棧敷)

83 寛仁二年四月十九日 渡狭食<sup>●</sup>(敷)見物(棧敷) ……同様に他2例

### 34 「敷」字を「食」字で通用

◆ 棧敷6（棧敷0・散敷2・狭敷1・狭食3）

84. 寛仁二年四月十九日 渡狭食見物 ……同様に他2例

「ぬじき」の「じき」を字音「ジキ」で通用させた例である。

## 三 ま と め

音の通用に関して特徴的なものに限り用例を挙げたが、全ての用例の詳細な検討は未だできていない。しかし、音の通用と思われるもの、中でも特徴的なものを見たときに幾つかの興味深い点が見えてきた。

まず、道長は漢字使用の際に、字音・和訓の別を問わず、特定の音に対して強く結び付いている漢字を持っていることがある。それは特に人名を表記する場合に顕著である。「音の代表漢字」と呼んでもよいかもしれない。これは現代の我々も人名を表記する場合には、同様にあてはまることであり、ある音に対して強く結び付いている漢字があるであろうと思われる。ただし、それは全ての人がある音に対して同じ字を想起するというのではない。道長の場合であれば、和訓「なり」に対して強く結び付いていたのが「成」字であり、和訓「しげ」に対しては「重」字だったであろう。字音の場合だと、字音「キウ」に対しての「久」字が例として挙げられよう。

通用が起こる際には、通用を起こさせる要因となるものが存在していることが多い。何が要因になるかはその時により状況により様々であるが、最も理解しやすいものの一例を挙げるならば、通用を起こしている文字の前後に登場する文字の影響である。前後の文字の字形に牽引されて、本来書かれるべき字形ではなくなってしまうものが多い。つか見られた。

また、文字の意味や語のイメージというものも通用に大きく関わっていることがわかった。例えば「沈」字を「深」と表記した例などがそうである。

さらに、心理的なものが要因となるものもあるように思われる。「不静」などは書かれた当時の心の動きが見えてくるようで非常に興味深い。

通用の際に選ばれる漢字というのは、「形」、「音」、「義」が近似していれば何でも使える、というわけではないことも分ってきた。おそらくは当時の貴族社会内で許容されている「通用の範囲」というものがあつたと考えられ、その範囲外の漢字は、御堂関白記が極めて私的な性格を持つものであつたとしても、殆ど選ばれることはないと考えられる。

そして、道長は決して誤つた表記ばかりしているわけではないということが、調査を進めるごとに理解されてきた。何か要因があつてそれに牽引された結果が誤記誤用のように「表面上」見えてしまうのである。道長は決してずっと書き間違いを犯しているわけではない。誤りが多いのは確かに多いのかもしれないが、しかしそう判断する前に、それ以外の大量の「正書」がある、ということをしちんと押さえておかなければ、冒頭にも述べたように、御堂関白記には誤字脱字が多く、そしてその修正跡もまた多い、という、極めて限定的な、且つ、表面的な判断を下してしまうことになるのである。御堂関白記自筆本は現存する多くの男性貴族の日記と異なり清書されていない。つまり草稿といえるような状態であり、我々の手控えとしての手帳やノートと変わらない。そのことに対する配慮なしに表面的な事象だけで道長の文字遣いについて評価することは、やはり適切とは言えないであらう。

本稿は、御堂関白記における音の通用ヨミに関して、できるだけ正確な用例の採録と、その用例数の調査を第一義としたため、これだけでは単なるデータ集にすぎない。今後は、これを基に各用例の詳細検討、考察に入っていかなければ

ばならない。その際、御堂関白記自筆本だけでは当然のことながら、道長の表記行為や、表記に際しての思考等に関して、核心に近づくような考察をすることができない。御堂関白記古写本の調査、そして、同時期の日記である小右記、権記の調査、さらに辞書類の調査などをひとつずつ精確に行いつつ、それら別の資料を通して、再び御堂関白記を眺めてみるというような多面的な調査、考察をしていかなければならない。すべて今後の課題としたい。

注(1) たとえば、高松政雄（一九六二）など。

(2) 本稿では、我々が正しいと思っているところの表記を「規範的表記」と呼び、そこから外れるものを「変則的表記」と呼ぶこととする。

(3) ここでいう「音」とは漢字の所謂字音のみを指すのではなく、字音・和訓を合わせた、漢字の「読み」の事を指す。

(4) 勿論、用例数のみで変則的表記であるのか、または誤記誤用であるかどうかを判断するのは無理であるが、用例数の多少が、誤記誤用かどうかを判断する上での、ある程度の指標にはなりうると筆者は考える。

(5) 佐藤（一九八〇）によると「本来書かれてある筈の文字」ということだが、規範的表記という言葉を加えることとした。

(6) 『日本国語大辞典』に「泰伯」の項無し。『国史大辞典』の「泰伯説」項参照（八巻 p.857）

(7) 以下、読みの表記は全て『日本国語大辞典』による。道長がそう読んだかどうかまではわからない。

(8) 『国史大辞典』「論義」の項参照（十四巻 p.828）

(9) 増画は、増画の結果、譌字となる例が多いが、「列」字が「例」字と表記されるような例もあり、「義」字を「儀」字と表記したものも一応増画として良いと思われる。

(10) 「議所」の例も「叙位議」に関する文中に登場するものは「儀所」であり、「除目」に関するものは「正書」の「議所」であり、文脈により明確に分かれていた。

(11) 『日本国語大辞典』「飯屋」の項参照（三巻 p.1127）

(12) 『日本国語大辞典』「借家・借屋」の項参照（三巻 p.1128）

(13) 『日本国語大辞典』「下襲・下重」の項参照（六巻 p.753）

## 参考文献

- ・『日本国語大辞典 第二版』（小学館 二〇〇〇年～二〇〇二年）
- ・『国史大辞典』（吉川弘文館 一九七九年～一九九七年）
- ・沖森卓也・三省堂編修所（編）『三省堂五十音引き漢和辞典』（三省堂 二〇〇八年）
- ・陽明文庫（編）『記録文書篇 第一輯 御堂関白記 一・二』（思文閣出版 一九八三年）
- ・峰岸明（編）『陽明文庫蔵本 御堂関白記自筆本総索引（一・二） 古典籍索引叢書 第十四・第十五卷』（汲古書院 一九九六年）
- ・山中裕（編）『御堂関白記全注釈』（二〇〇三年～二〇一二年）
- ・倉本一宏『藤原道長「御堂関白記」（上・中・下）』（講談社 二〇〇九年）
- ・高松政雄（一九六二）「御堂関白記の実態——主に表記の面から見た——」『国語国文 三十一・九』
- ・小山登久（一九七二）「御堂関白記自筆本の用字について——和語の記し方を中心に——」『フートルダム清心女子大学国文学科紀要（5）』
- ・佐藤稔（一九八〇）「『御堂関白記』における変則的用字——その実態を述べ字音資料としての吟味に及ぶ——」『秋田大学教育学部研究紀要 第三〇号』
- ・峰岸明（一九九六）「『御堂関白記』自筆本の漢字字体記述に関する一試論」『横浜国大國語研究 十四』
- ・峰岸明（二〇〇三）「『御堂関白記』自筆本の漢字表記」『東京成徳国文 二十六』
- ・高橋久子（二〇〇四）「平安時代の文獻に見られる漢字の通用現象に就いて 其二」『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学 五十五』

（やすだ ひろしげ・関西学院大学大学院文学研究科博士課程後期課程）